

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【タイトル】

邪眼系聖剣持ちの少年が行く（タイトル募集中）

## 【作者名】

深那由他

## 【あらすじ】

神によって色々弄られた世界で、本来ならば原作に関わることなく死ぬはずだった少年が生き返った。ただしその少年には神の暇潰しのため、駄目押しとばかりに異常な能力が与えられていた。

しかし少年はそれに気づくことなく、色々やらかしながら生きて行く。      そんな感じの話を目指します！

処女作になります。生暖かい目で見ていただけるとありがたいです。また、作者の原作知識は二次創作とWikiのみです。間違い等ありましたらご指摘よろしく願います。

## ある神の暇の潰し方

S i d e ???  
~~~~~

ふぁーあ、ヒマだなあ。なんかおもしろいことないかなあ。

死んだ奴をいろんな創作の世界に特典渡して転生させるっていうのも飽きてきちゃった。最近はドイツもコイツも似たような特典選びやがるんだよなあ。

この間、転生させた奴なんか「ハーレムだー！」とか言っただけで色々特典ねだってきたわりに弱かったし、その上すぐ殺されちゃったしで踏み台のテンプレートで全然楽しめなかったし、その前の奴も似たような感じでつまらなかったし……………。

はあ、どうすればおもしろくて、それでいて僕の退屈しのぎになるような物語になるんだろう？

あつ、そうだ！

他の世界から転生させるんじゃなく

て、そこに元から存在する人間に特典をつけてみるのはどうだろうか？  
うんうん、自分で言うのもなんだけど僕って天才かもっ！

よしよし、そうと決まればまずは今回の舞台を決めないと。

そうだなあ。前の奴等が選んでたけど、そいつらと比較してみたいし、『ハイスクールD×D』の世界でいいかな。平行世界ってことにして登場人物のことも色々いじってみようか。

さて、次は玩具を選ばないと……………

おっ！

こいつ

なんか丁度いいかもしれない。本来は原作に関係のない所で死ぬみ

ただしい。それを生き返らせて、その時ついでに特典を渡せばいいかな。

それじゃあいよいよ一番重要な特典選びかな。へえ、こいつ

の末裔なのか。ならあの聖剣でいいか。うん、でもそれだけじゃつまらないなあ、どうしようか。そうだった！

持ってたのと同じ神器とかいいかも！  
邪眼持ちの聖剣使

持ってなんかおもしろくなりそうだし！  
他にもあれとかつ

けて……………あつ、あのキャラの性別を変えちゃうのもおもしろそうだなあ。あとはあれをこつして

ひとまずこんな感じかな。うん、ちょっとつけすぎて最強クラスになっちゃった気はするけど、それもこいつ次第になるし、何よりその方が面白くなりそうだからいいよねっ！

それじゃあちょっと弄ってみるか……………うう、ほいとな！

よっし、作業かんりよ。後はゆっくりお菓子でも食べながら見物するとしますか。

それにしても、この僕が期待しているんだから、せいぜい頑張ってお話をおもしろくしてくれよ。そして僕の退屈しのぎになってくれなあ、シオン君

Side out~~~~

かくしてとある者の思いつきによって、本来ならば誰にも知られることなく死ぬはずだった少年は、本人の預かり知らぬ内にその身に余る能力を与えられ、生き返ることとなりました。

これより始まりますはそんな存在自体がイレギュラーな少年が、自分の力の異常性に気づかない少年が、完全に正史とはかけ離れた世界で無自覚に色々やらかしながら生きて行く物語でございます。

さてさて、少年の行く末はどうなりますことやら

## 少年の帰宅、天使長の誓い

「あれ？ 僕どうしたんだっけ？」

確か、友だちと別れて小学校から家に帰るところで……。あつ、変なコウモリみたいな羽のおじさんに追いかけて、逃げる途中でこけちゃったんだ！  
でもあのおじさんは、どこ行ったんだろ  
う？

「うわっ、もうこんな真暗だ。早く帰らないとお母さんに怒られちゃっー！」

周りが暗かったこと、帰るのを急いでいたことなどで少年は気づかなかった、着ていたシャツが血にまみれていることに。

~~~~少年帰宅中~~~~

あれ？知らない靴がある。誰かお客さん来てるのかな？

「母さん、ただいま〜」

リビングに入ると金色の髪のかっこいいお兄さんがいた。

「おかえりなさい、無事でよかった。君がシオン・ランスロー君ですか？」  
「？」

「はい、そうですけど……。お兄さんは誰ですか？」

「私は……。そうですねえ、シオン君のお父さんの友だちです。今日は君のお父さんとお母さんに頼まれて、君を迎えにきたんですよ。」

お兄さん、ミカエルさんという名前らしい、が言うには、父さんと母さんは遠いところに行ったらしい。

僕を置いて二人で遊びに行くなんてずるい……………、と僕が言うとミカエルさんは、急に僕のことを抱き締めた。ビックリして「どうしたの?」と聞くとミカエルさんは、謝りながら泣き出してしまった。

その後しばらくしてから泣き止んだミカエルさんは、優しい声で僕にこう言った。

「出かけている間、シオン君を預かるように君のお父さんたちに頼まれているんです。だから私と一緒に行きましょう。」

「何だかよく分からないけど、父さんがそう言ったのならミカエルさんと一緒にいきます。」

そう答えた後、学校から走って帰って来て疲れていたせいか僕はミカエルさんに抱き締められたまま、寝てしまったらしい。だからその後のミカエルさんの言葉にこのときの僕は気づかなかった。

「エスター・ランスロー、スズナ・ランスロー、貴方たちの最愛の息子は責任を持って私が育てます。だからどうか安らかに……………」

Side out

「シオン君? おや、眠ってしまいましたか。」

それにしても、はぐれ悪魔に殺されてしまったエスターとスズナの息子、シオン君を保護しに来て、彼が既にはぐれ悪魔に襲われたと聞いたときは、心臓が止まるかと思いました……………。

教会最高クラスのエクソシストであり、また神の不在を知りながらも教会のために尽力してくれた。そんな彼らの息子でさえ守れなかったとなれば私は……………。

血まみれであったこととそのわりに元気だったことが気がかりではありませんが、それでも彼が無事で本当によかった。

これからシオン君きは、様々な苦難が待ち受けているとは思いますが、それでもこの先、この子が不幸を感じることなく暮らせるように私が守っていかねければ……

## 少年の転居、聖剣遭遇

次の日、目が覚めるとミカエルさんはいなくなっていて、変わりに綺麗なお姉さんがいた。そのお姉さんも父さんたちの友だちで、ガブリエルさんという名前だつて。

「何だか天使みたいな名前だね」

と言つたら苦笑いされた。むっ、なんでかな？

お互いに自己紹介したあと、ガブリエルさんが作ってくれていたご飯を食べた。すごくおいしかったから

「お母さんと同じくらいおいしいね」

つて言つただけけど、そしたら急に、ガブリエルさんに抱き締められた。息ができなくて苦しかったけど、お母さんと同じあつたかい感じがしてうれしかった。

「ご飯を食べたあと、いつもみたいに小学校に行こうとしたら止められた。今から僕たちはイタリアという国のお父さんが昔住んでいた所に行くから、学校には行けないって言われた。」

旅行なんてしたことなかったからうれしくなつて、その後の話はあんまり聞いてなかったんだけど大丈夫かな？ そつえば、ミカエルさんは先にイタリアに行っちゃったんだつて。

話をしたあと、ガブリエルさんに荷物の準備を手伝ってもらつた。

ところで、旅行つて服とか持つてるもの全部を持っていかなきゃダメなんだね。僕、知らなかつたよ。

~~~~~  
空港

「うわ、おっきな飛行機だね。ガブリエルお姉ちゃん！ これに乗るの？」



「そうですよ。シオン君は飛行機に乗るのは初めてですか? (お姉ちゃん…………… いい響きです!)」

~~~~~機内

「うわぁ! た、高いねえ。ガブリエルお姉ちゃん、こわくない? 手つないであげようか?」

「私は大丈夫ですよ? シオン君こそ、こわいんじゃないですか?」

「え? そ、そんなわけないじゃん。わぁっ! ゆ、ゆれたあ! ……………。うう。い、今のはお姉ちゃんをおどろかそうとしたただけだからね。別にこわいわけじゃないよ、ぜったい違うからね!」

「はいはい、分かっていますよ。シオン(か、かわいい!)」

~~~~~飛行機を降りたあと

「やっと地面だ〜。ま、まあ全然恐くなかったけどね…………… と、ところでお姉ちゃん、ここからはどうするの?」

「ふふっ、次はあの車に乗りますよ。シオン、ちゃんとしてきてくださいね」

「もおっ! そんな事いわれなくなっちゃって迷子になんかならないから、大丈夫だよ。なんたって、もう来年には7才になるんだから」

~~~~~

「ねえ、お姉ちゃん。なんでこんなところで停まったの？ おっきなお城みたいな建物しかないけど……」

「その建物が今日からシオンが住む所ですよ。それと、お城ではなくて教会です。」

「すごい!! こんな大きな所に住むんだ。あとでいつしよに探険に行こうね、お姉ちゃん!」

「探険もいいですけど、その前に持ってきた荷物をなんとかしないとイケませんよ? ミカエル様の所にも行かないとイケませんし。それに、その後は私とお勉強もしないと…… って、あら? シオン?」

ふう、あぶないあぶない。いくらお姉ちゃんに言われたって、勉強なんてしてられないよ。せつかくの初めての旅行なんだからねっ。さてとっ、さっそく探険だ!

う、うーん、じじいだろう? いつのまにか教会の外に出ちゃったみたい……さっきの部屋のところでひきかえたほうがよかったかな? それにしても、すごくキレイな花畑と湖だなあ。ん? あれなんだろう?

うわあ〜! 湖の近くのお墓みたいなのに、剣が刺さってる! なんだか、お母さんがよく話してくれた昔ばなしに出てくる騎士の剣みたい! ち、ちょっとくらいならさわってもおこら

れないかな、いいよね？

シオンSide Out~~~~

「シオンー！ どうですかー！」

はあっ、いったいシオンはどこに行ってしまったんでしょうか。荷物の整理もせずになくなるなんて、見つけたらお仕置きです。

「うわぁ〜!？」

あっ、この声はシオンですね。これでようやく見つかりそうです。

って、この先はあの聖剣の保管されている所っ！ いくらシオンが担い手の子孫とはいえ、あの剣はまずいです。最初の担い手であった彼の騎士以降は誰も担い手と認めず、それどころか命を落とす者すら出たあの剣だけはっ！

「シオンっ！ 大丈夫で……………って、え？」

ガブリエルSide out~~~~

その熾天使が少年の悲鳴の聞こえた場所で目にしたのは、光に包まれ、剣を手にした少年の姿だった。命を落とすこともなく怪我1つさえ負っていない、それどころかあの剣が喜んでいるようにすら感じる。

暫くの静寂のあと、呆然とする天使を呼び戻したのは、剣がひかっただことに驚いて泣き出してしまった、少年の泣き声だった。

こうして、少年は聖剣の担い手となった。かの伝説の『湖の騎士』ランスロットが愛剣、アロンダイトの担い手に

## 天使長の依頼、青年の誓い。

剣をさわってしまった後、いつのまにか隣にいたお姉ちゃんに怒られた。泣きながら怒ってたからあんまり恐くなかった。

それでアクビしちゃったのはたしかに僕がわるかったよ。でもだからって今日のオヤツぬきはひどすぎるよ！ お姉ちゃんのおには…… いやっ、な、なんでもないです、おねえさま。だから一週間オヤツ抜きはゆるしてー！

Side out~~~~

ミカエルSide~~~~

ガブリエルから、シオンが聖剣アロンダイトに選ばれたという連絡が届いた。

ああ、この事が広まってしまったら、またあの子が狙われるようなことに…… ことになってしまった以上、早急に自力で敵から逃げられる程度にはあの子を鍛えなくてははいけません！ その為には……… そうですね、彼に頼んでみましょう。

~~~~

「……と言つわけです、よろしくお願ひしますよ、ケイ」

「何がどういっわけなのかさっぱりなのですが、いいんですか？ いくらエスターさんの息子とは言っても、まだ6歳なんでしょう？ 鍛えるのが悪いとは言いませんが、いきなり打ち合いから始めるのは危険ではないですか？」

「私も本来であれば、あの子にそんな無茶をさせたくはありません。しかし、早急に鍛えなければあの子の命が危ないのです。( それに、何故かあの子なら大丈夫な気がしますし……………」

「分かりました。その子が狙われる理由が気にはなりますが、俺がエスターさんに教えられたこと、俺にできる範囲でその子に教えましょう!」

「そうですね! 貴方なら引き受けてくれると思っていました。では早速、護衛も含めているので今からお願ひしますね?」

ふう、熾天使ガブリエルとエスターの弟子であるケイが傍にいれば、他の勢力も迂闊にシオンに手は出せないでしょう。まだまだ不安ではありますが、これでひとまずは安心です。

「はい、分かりまし……………って、は? 今から!? それはいくらなんでも急すぎやしませんかね!? 俺にだって準備する時間は必要なんです!」

ケイが何か騒いでいますが、まあいいでしょう。シオンの安全に比べれば些細なことです。

Side out~~~~

次の日、ミカエルさんがケイさんっていうお兄さんを連れてきた。ちよつと、ほんとにちよつとだけお兄さんの顔が恐ろしかったから、またあんまり話を聞けなかった。だ、大丈夫かな? お兄さん、おこつたりしないかな?

なんて考えてたらいつのまにか変な光る剣を渡されていた。それとケイさんも同じ剣をもってこつちを向いていた。

あつ！　もしかしてチャンバラごっこ？　遊んでくれるなんていい人なのかなあ、恐いだなんて思って悪かったかな？　よし、まけないぞー！

~~~~~30分後

しばらく、ケイ兄（まちがえてそう呼んだら気に入ったみたい）と遊んでいたら僕の方の剣がこわれちゃった。ケイ兄がこわい顔で今日はここまでにしよう、と言った。

怒っちゃったのかと思っすぐに、「おもちゃをこわしてごめんなさい」ってあやまった。

そしたらびっくりした顔で、「お前が悪いんじゃない、明日からはもっと丈夫な剣を持ってくるから気にするな」と言ってくれた。

自分の物をこわされたのにおこらないなんて、ケイ兄はすごくやさしいなあ……………

Side out~~~~~

シオンの護衛と訓練を任された日の夜、ミカエル様に呼び出され様子を聞かれた。

「ケイ、シオンはどうでしたか？」

「まず、身体能力が異様に高かったです。はじめから俺の動きについてこれていましたし、恐らく既に上級悪魔と戦えるほどの身体能力があると思います。剣筋も最初こそ年相応のものでしたが、俺の動きを吸収したのか、すぐに上達しました。最後に剣が力に耐えられずに砕けなければ、俺は負けていたと思います」

そう、完全に負けていたのだ。打ち合っていたとき、シオンからは

無意識に手加減している感じがしたのだから。その才能は人間の限界をゆうに超えてしまっている。正直、そんなシオンの事が恐ろしかった。だけど、アイツが泣きそうになりながら謝っている姿を見てそんな思いは吹き飛んでしまった。そして決意も固まった。

「実力的には今のままでも大丈夫だと思えます。ですが、あいつ、シオンはまだまだ子供です。それに自分の力の事を分かっています。そのせいでこれから色々な悪意に晒されるでしょう。俺はそんな全てから陰ながらシオンを守ってやりたいと思います」

「そうですか、貴方がシオンを拒絶する心配もしていたのですが、要らぬ心配だったようですね。私も最善は尽くしますが、願いますね」

「もちろんですー」